

B型肝炎に対する新規治療薬の開発状況

B型肝炎にはいくつかの病期が存在し、ウイルスが多く存在しているにもかかわらず、血清ALT値が正常である「免疫寛容期」、肝炎が発症している（ALTが上昇している）「肝炎期」、低ウイルス量で肝機能が正常な「鎮静期」に大まかに分類されます。「免疫寛容期」、「鎮静期」は投薬せず経過観察することが基本です。一方、「肝炎期」には核酸アナログ製剤（ベムリディ、バラクルードなど）を投与することで、ウイルス量を減らし、肝機能を正常化させます。このように、現在の医療でB型肝炎をコントロールすることは可能となっていますが、ウイルスを体内から排除することはできていません。このウイルスはcccDNAというコンパクトな形で肝細胞の核内に潜んでおり、排除することが難しいのです。現在、cccDNAを排除する薬剤の開発が進められており、将来肝炎のコントロールだけでなく、ウイルスの排除が可能になるかもしれません。

C型肝炎に対するワクチンの開発状況

DAA（マヴィレット、エプクルーザ、ハーボニーなど）という薬剤の開発により、8～12週間、薬を飲むだけでC型肝炎が治せるようになりました。副作用もほとんどなく、他の合併症があっても治療可能です。ウイルスが排除されると、肝がんの発症率は低下しますが、ゼロにはならないので、採血や腹部超音波検査による経過観察は必要です。一方、C型肝炎ウイルスに対するワクチンの開発は難航しています。ウイルスの変異が起きやすいこと、細胞性免疫応答を起こすことが難しいことなどがその要因と言われていています。新型コロナウイルス感染症ではmRNA（メッセンジャーRNA）ワクチンで遺伝子情報をもつ分子を投与することにより、体内でウイルスのたんぱく質を作らせ、免疫反応を誘導して、感染予防や重症化予防に成功しました。C型肝炎でも近い将来、mRNAワクチン技術を応用したワクチンが開発されることを期待しています。

《著者紹介》

加川 建弘（かがわ たてひろ）
東海大学医学部消化器内科 領域主任教授
診療科長 肝疾患医療センター長



1961年生 奈良県出身

1986年 慶應義塾大学医学部卒

1999年～2001年アメリカ タフツ大学留学

日本内科学会総合内科専門医 指導医、日本消化器病学会専門医指導医、日本肝臓学会専門医 指導医、日本消化器内視鏡学会専門医 指導医、厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員、肝炎情報センター情報発信力強化戦略会議委員、神奈川県肝炎対策協議会委員、神奈川県肝疾患審査会委員、神奈川県肝がん・重度肝硬変認定審査会委員、神奈川県社会福祉審議会委員